

# 日本の遷都の系譜

大石 慎三郎

## 目 次

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1. はじめに          | 6. 平安京時代        |
| 2. 飛鳥宮時代と難波・近江遷都 | 7. 鎌倉・京都・京都室町時代 |
| 3. 藤原京時代         | 8. 安土・桃山・江戸時代   |
| 4. 平城京時代         | 9. 江戸より東京へ      |
| 5. 長岡京時代         |                 |

## I. はじめに

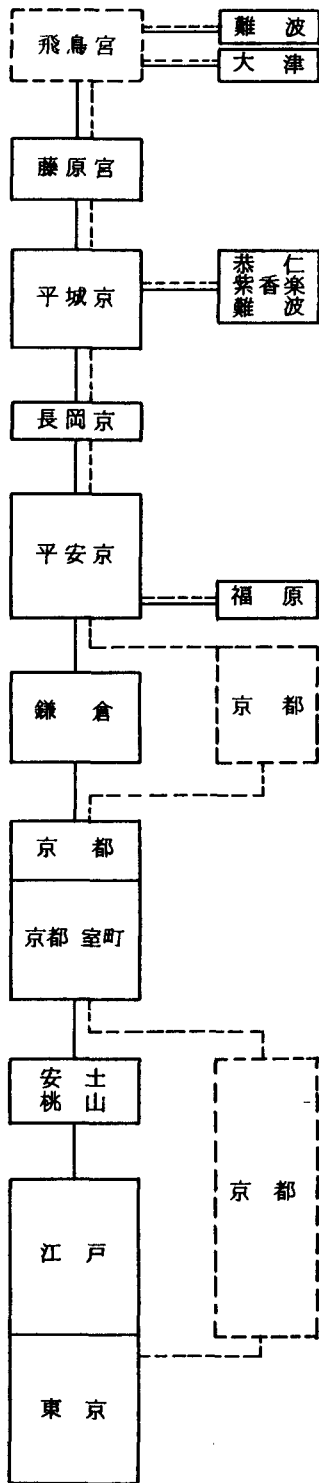
昭和30年代半ばより、わが国の高度経済成長時代が始まると、農村人工の都市集中がはじまり、農村の過疎化、都市の過密化現象が目立つようになった。なかんずく首都東京への集中には顕著なものがあり、それにつれて集積のメリットよりデメリットの方が目立つようになった。東京の一極集中の是正論が各種の形で論ぜられるようになり、その一環として遷都論、また首都機能の一部地方移転論などが登場するわけである。これら諸論の前提として、わが国の歴史のなかで遷都がどのような状況のもとで論ぜられ、どのような問題を解決しようとして行われたかを、たどってみよう。

岩波書店の「国語辞典」(第三版)によると、“遷都”とは「都を他の地に移すこと」とあり、“都”とは「皇居または政府がある所」とある。わが国の遷都の歴史を辿るとき皇居と政府が同一の場所にある場合もあるが、両者は別の場所にあった時間も短くない。その場合“都”を政府がある処という意にと

り、皇居の処在という意を従として扱うこととしたい。

ところで遷都の歴史を辿るとき、時代をどこまで遡るかであるが、古い時代は諸説があって事実の確定が難しい事が多いので、一応通説にしたがって第33代推古天皇あたりから始めることとする。推古天皇の元年は西暦593年にあたり、わが国では伝来した仏教に帰依しこれを国家統治の支えとする蘇我馬子と、それに反対する物部守屋とが争い、物部氏を亡ぼした蘇我氏が聖徳太子と組んで新しい国家体制をつくりだそうとしていた時期にあたる。聖徳太子の憲法第17条が發布されたのは推古天皇の12年であり、太子によって中国に派遣された遣隋使がつぎつぎと中国の新知識を持ち帰っていた時期でもある。また隣接する朝鮮半島では、新羅・高句麗・百済が鼎立し、中国および日本など隣接諸国をまきこみながらお互いに激しく争いあっていた。なお天皇の代数については、学界に異説もあるが、便宜上これまで用いられてきたものを使うこととした。まずわが国の首都変遷図をつくってみると(第1図)のようになる。

第一図 わが国における首都変遷図



## 2. 飛鳥宮時代と難波・大津遷都

第33代推古天皇から第40代天武天皇までは、“一代一皇居時代”といって、天皇が予め用意された都において政治を見るのではなく、一代ごとに皇居をかえるのが一般であった。しかしこの間も皇居が奈良県高市明日香村あたり、すなわち飛鳥川流域で、天香久山から畝傍山にはさまれた狭い地域を、第34代舒明天皇は飛鳥岡本宮、第35代皇極天皇は飛鳥板蓋宮、第37代斉明天皇は後飛鳥岡本宮、第40代天武天皇は飛鳥浄御原宮というように、あちこちと移動しているのので、“飛鳥宮時代”と総称することとする。

しかしこの時代にも二度ばかり都が飛鳥の地を離れたことがある。その第一回目は第36代孝徳天皇が大化元年（645年）に都を現大阪市にあたる難波長柄豊碕宮に移した時であり、第二回目は第38代天智天皇が天智6年（667年）に近江の大津宮に移した時である。まず第一回目についていえば、この年の6月それまでわが国政を実質的に握っていた大豪族蘇我入鹿を、中大兄王子（後の天智天皇）と中臣鎌足とが暗殺し、いわゆる“大化改新”と呼ぶ大改革にのりだした時期である。すなわちそれまでは氏姓制度に基づく豪族たちが、土地と人民とを個別的に支配していたのを否定し、公地公民制による中央集権・官僚支配体制の構築を目指し、また京師・国・郡・里などの地方行政組織、戸籍制度の導入と班田収授法、租・庸・調といった統一的税制の確立がはかられた。いわば統一国家としてのわが国の出発を目指す大改革であった。難波遷都の第一の理由は、氏姓制度に基礎をおく豪族達の勢力がまだ強く残っている飛鳥地方を脱出して、この改革遂行のフリー・ハンドを保つためであった。しかし都を他の場所ではなく、あえて難波の地（現大阪）を選んだことについては、いま一つ当時わが国が直面していた対外問題があった。

まず中国であるが、618年それまで中国を支配していた隋を亡ぼして強大な中央集権国家である唐が成立した。つれて朝鮮半島では新羅がこの唐と組んで高句麗・百済に圧迫を加えはじめた。わが国は古来から百済と深い関係を結んでいたため、このような大陸の動きにも対応する必要があり、瀬戸内海の要衝である難波がそのための都として浮上してきたのである。ところで唐は新羅の要請で大軍を派遣、660年唐・新羅の連合軍が百済の首都を攻め、王を捕えて、ついにこれを亡ぼした。この時百済の遺臣たちは我が国に救援を求めたので、2万7000人の兵力を派遣したが、663年白村江（綽江）で両国連合軍と戦って大敗、わが国は多数の百済人を伴って半島から撤退した。

唐・新羅連合軍の追撃をおそれたわが国は、半島に近い対馬・杵岐・筑前には防人と烽火を置き、また筑前（福岡県）には水城を設け、また九州から畿内に至る間に多数の山城を築いて備えるとともに、都を難波から飛鳥にもどし、さらにそれをより防御に適した近江の大津の宮に移した。天智6年（667年）のことである。しかしそれは幸に杞憂にすぎず、わが国の政治は段々と内政重視に移り庚午年籍の作成、近江令の制定など大化改新の仕上げ作業に入るが、671年天皇が死ぬと、天皇の子大友皇子と天皇の実弟大海人皇子の間で皇位継承をめぐる戦い＝壬申の乱がおこり、戦に勝った大海人皇子（天武天皇）は都を再び飛鳥の地にひきもどした。これが飛鳥浄御原宮である。

以上のように第33代推古天皇から第40代天武天皇までの間は、一代一皇居を原則としながら、その地域は飛鳥地方という奈良盆地南東部にある狭い地方に限られていた。“飛鳥宮時代”と名付ける所以であるが、しかしこの間二度ばかり飛鳥の地というより奈良の地を大きく離れたことがあった。第一回目は難波遷都であり、第二回目が大津遷都である。

難波遷都は旧勢力の地盤を離れて大化改新というわが国歴史上でも数指に入る大改革政治を推進しようという狙いと、この頃より一層深いかかわりを持ってきた、中国および半島とを視野に入れてのものであった。しかしこの対外積極関与は軍事上の大敗と外交上の失敗を招き、政権そのものの危機となり、それをさけるため大津遷都をせざるを得なくなったのである。いわば首都防衛のための遷都ということになる。

### 3. 藤原京時代

大化改新の立て役者中大兄皇子（天智天皇）と、大海人皇子（天武天皇）とは兄弟であるが、兄がどちらかといえば外向型政治家であるのに対し、弟は内政型政治家であった。大海人皇子は第37代齊明天皇（女帝で第35代皇極天皇重祚・中大兄皇子はその皇太子）が百済救援のため九州に行幸している時も、中央にあって内政を担当、その声望は高かった。百済救援が失敗、中大兄皇子が都を大津に移し即位して天智天皇となるとその皇太子となるが、天皇との仲は円滑にゆかず、やがて出家して吉野に退去した。やがて壬申の乱がおこり、近江の大友皇子軍に勝って飛鳥浄御原で即位した。第40代天武天皇である。天皇は浄御原律令の制定、国史の選修、族姓を改めて八色の姓を定め、また爵位60階の制定など、もっぱら皇室を中心とした律令体制堅めに力を入れた。

この方針はやがて天武天皇の皇后で、天皇死亡のあと皇位をついだ持統天皇（第41代）にひきつがれ、わが国最初の皇都である“藤原京”の建設へと発展した。“藤原京”は大和三山（耳成山・天香山・畝傍山）の間にひろがる平地に中国の王都を模して造られた皇都で（中国北魏の洛陽を模したとの説もあり、また唐の長安を模したとの説もある）、それまでの“飛鳥宮”が、その西北部に発展

した形で作られており、現在の奈良県橿原市と明日香村に位置している。南北約3.1キロメートル、東西約2.1キロメートルで、そこに南北12条、東西には左京・右京に分れるが、その各々に四坊の条坊制がしかれていたと考えられている。

京城の北部に天皇の住居内裏と、政務をとる官庁とが設けられていた。これが大内裏である。ここに仕出する官人としての豪族たちは、京中に集住される仕組で官庁の市も設けられていた。つまり古代豪族たちはそれまでのように自領に住んでいるのではなく、それを捨てて新京に住み政庁に出仕して律令官人になることを強制されたわけである。いわば藤原京の造営は、それまでの天皇と豪族の連合政権であったわが国の政体を、天皇とその官人による政体に切りかえる作用を伴うので、それに乗り、それを積極的に利用した藤原氏は栄え、それに乗り切れなかった大伴氏は衰退の途をたどっているように、単なる官の位置および規模・形態の変化ではなく、政治体制、社会体制の変革を秘めたものであった。

ここに都があったのは持統8年(694年)から、和銅3年(710年)までの17年間、天皇で数えると第41代持統・第42代文武・第43代元明の三代であるが、ここで刑部親王・藤原不比等などの手で大宝律令が編纂され、律令国家体制が、法制的にも整えられた。

#### 4. 平城京時代

藤原京において、天皇制官人国家の体制は急速に発展をとげ、やがて狭い藤原京では政治を賄いきれなくなった。そのため新たに造営されたのが平城京である。

藤原京は奈良盆地の一番南端に営まれていたが、平城京は北端に営まれた。それまでの政治の中心地であった盆地南端部から北端部に移ったことは、この地に残っている氏姓制

的豪族体制をより完全にふり切って、天皇制官人体制を確立するという狙いもあったろうが、基本的には狭すぎる藤原京を、より適した盆地北端部に移しかえたと考えてよいだろう。その証拠として、さしあたり次の二つのことがあげられる。その一つは、奈良盆地には、盆地東端山際にそって走る“上ッ道”と、それとほぼ並行して南北に走る“中ッ道”と“下ッ道”との三本の道がある。藤原京はその“中ッ道”と“下ッ道”にはさまれる形で造られているが、平城京は“下ッ道”を新京の朱雀大路として、その西側に右京をつくっている。つまり東西は藤原京の約二倍に設計されているわけである。南北も藤原京より長く、また左京の東側に外京も造られているので、面積は約三倍、そこに住んでいた人は昭和初期20万人との説がだされ、以降それが定説になっているが実際はその半分くらいであろうと推定されている。また右京と左京に各々東市と西市とが設けられ、毎年前半と後半とに分けて交互に市が開かれ、住民の需要を満たすようになっていた。その第二は、藤原京時代第42代文武天皇のもとで大宝律令を撰集した藤原不比等が平城京に移ってさらにそれを修正して養老律令を編集、ここに以降の日本政治を規定する律令政治の基本法が完成していることである。

この平城京は和銅3年(710年)から延暦3年(784年)まで約74年間続く、わが国最初の長期にわたる都であり、この間律令国家体制が整う。また律令官人としての藤原氏と、鎮護国家仏教としての仏教の抬頭で特徴づけられている。まず藤原氏は鎌足の子不比等の代になっているが、彼は大宝律令、つづいて養老律令と、律令国家の基本法の編さんに抜群の力を示し、律令官人のトップの地位を占め、さらにその娘宮子を第42代文武天皇に、さらに光明子を第45代聖武天皇に納れるなどして、皇室の外戚として地位を高めた。また仏教もわが国に渡来以来、国家鎮護を旗印に

勢力を伸ばして来たが、とくに聖武天皇は仏教に対する信仰が厚く、諸国に国分寺、奈良に總国分寺として東大寺を建立するなど、仏教を律令国家体制の精神的支柱としたため、その繁栄は目を見はるものがあった。

しかし平城京時代も平和・繁栄の一途をたどったわけではなく、若干の波乱もみられた。まず天平元年（729年）には、藤原氏が光明子を皇后に立てようとするのを、皇后は皇族に限るというそれまでの慣習を盾に、左大臣の長屋王が反対するだろうとして、王に謀反の疑いがあるとして自殺させた、長屋王の事件がおきている。しかしせっかく築いた藤原氏の地位も、当主および一族のつぎつぎの病死によって力が劣え、かわって橘諸兄が抬頭してくると、一族の劣勢を盛りかえそうと、天平12年（740年）藤原広嗣が九州太宰府で約1万の兵を集めて乱をおこした。これを藤原広嗣の乱というが、広嗣は橘諸兄政権のみならず諸兄を登用した聖武天皇までも批判の対象にしていたので、天皇はそれを恐れてせっかくの平城京を捨てて、恭仁・紫香楽・難波と転々と遷都をくりかえし、五年後にやっと平城京に帰っている。

聖武天皇が光明子との間にできた娘孝謙天皇（第46代）に譲位すると、その寵愛する僧道鏡が政権を握り、やがて彼は宇佐八幡宮の神職とはかり、神託にことよせて皇位をねらう事件がおこった。これは和気清麻呂らによって阻止されるが、平城京においては段々と僧侶・寺院による政治関与が激しくなり、正常な政治が困難となったので、やがて山城の長岡・平安京への遷都問題が登場してくる。

## 5. 長岡京時代

第50代桓武天皇は天応元年（781年）4月に即位するが、この年は辛酉の年にあたり陰陽道にいう革命の年でもあった。天皇は平城京70年の間に強大になり、政治そのものまで

左右するようになっていた寺院勢力をふりきり、人心を一新して新しい政治を行い律令体制を建て直そうと考えた。そのためには都を替えるのが一番良いと考え、これまで宮都のあった大和の地を捨てて、平城京より遠く離れた山城国乙訓郡長岡の地を選んだ。これを長岡京という。長岡京は長い間平安京ができるまでの臨時の都と考えられていたが、調査が進むにしたがって、条坊制に基づく計画された都市で、仮の都ではなくて本格的な都市づくりが行われ、中心部分の造営はほとんど終っていたことが明らかになってきた。まず立地的な条件から見ると、平城京が人口10～20万という人口を賄うには、大量の物資輸送手段である水運の便を欠いていたのに反し、長岡京は桂川・鴨川・宇治川に接し、膨大な消費を賄う条件を備えていた。工事は順調に進んでいたが、造営長官である藤原種継が反対派に暗殺され、その容疑者として皇太子早良親王が捕えられたが、親王はそれを冤罪だとして憤死する事件がおきた。そのため事の真相は判らずに終わったが、遷都というのは、それほど利害関係が複雑にからむ問題だということを、はしなくもこの事件は露呈することとなった。たまたまこのころ天皇の身边に度々不吉な事がおこるが、それは早良親王の怨霊だという説が流布し、ためにせっかくの長岡京を捨てて、桂川を渡った北東の位置をえらんで平安京を造ることになったといわれる。

せっかく造った長岡京をわずか10年ほどで捨てて、平安京に立地を移したことについては、たしかに前記のような事情が大きく作用しただろうが、いま一つ長岡京の立地は水運の便はあったとしても、その反対に洪水には弱かったという条件もあったろう。人災・天災が長岡京を亡ぼしたということになる。

## 6. 平安京時代

長岡京から平安京に移る延暦13年（794年）、桓武天皇は諸国の神々の弊帛を奉り、遷都と蝦夷経路の成功を祈願している。新しい都の造営と東北地方の経営とは、桓武天皇の二大政策だったわけで、後者のためには先の征討副使として東北経営にあたらせていた坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命している。また造都を推進する役所造宮職には、約160人もの大人員を配し、その長官（造宮大夫）には藤原小黒麻呂、つづいて和氣清麻呂を配している。そしてその労働力（造宮役夫）として諸国から公民を徴発するが、役夫を出した国に対しては租を免じるとともに、出挙（春に貸しだし、秋の収穫後利子をつけて返さすという雑税の一種、利率は約5割）の利率を引きさげ、役夫をださない国々とのバランスをとった。

このようにして新都（平安京）はできたが、また遷都反対派は根強く残っており、大同元年（806年）桓武天皇が死ぬと、新帝（平城天皇）に、わが国では前天皇の忌明には、新宮を建てるのが例になっている、と遷都をすすめる者があった。これは容れられなかった。しかし平城天皇の妃の生母藤原葉子は、天皇が病弱のため退位すると、勢力が失墜するのを恐れ、兄仲成らとはかって平城上皇を平城京に移し、その重祚をはかって挙兵したが鎮圧されて自殺した。これを葉子の乱という。このように大和平城京から山城への遷都は始めは波乱含みであったが、以降建久2年（1192年）源頼朝が鎌倉幕府を開くまでの約400年間日本の政治をとりしきる“都”となった。なお、“都”を政治ではなくて天皇の居所と解釈すると、明治2年（1869年）の東京遷都まで、平安京（京都）は1000年の都であったということになる。

平安京は東西約4.6キロメートル、南北約5.3キロメートルの、南北に細長い長方形で、その大きさは平城京とはほぼ同じで、京城の北部中央に宮城を設け、その中央から南に走る

朱雀大路によって右京と左京とに分けられ平城京同様条坊制がしかれていたが、右京は低濕地が多く、去る者はあっても来る者はない有様で、都の重心は次第に左京に傾いてゆき、さらに鴨川を東に渡って現在のようになっていた。人口は9世紀段階で10～15万人であったろうと考えられている。

平安京では仏教の影響を断った律令政治が広く行われたが、荘園制が進行するに伴い、官人としての藤原氏の勢力が段々と強まり、やがて摂政・関白の地位を独占し政治は藤原氏に握られるようになる。これを摂関政治という。しかし11世紀末になると、白河上皇が政治の実権を院に移したことから藤原氏の力は次第に劣え、いわゆる白河・鳥羽・後白河上皇による院政政治が続くが、この間おこった保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）を経て、政治の実権は武家の棟梁である平清盛に移ってゆく。

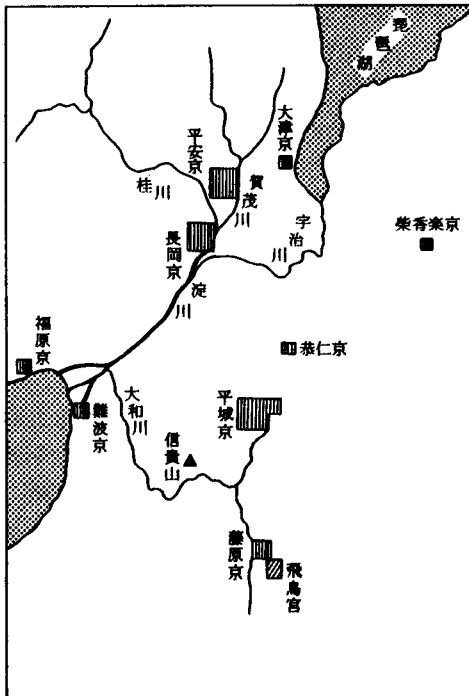
清盛の祖父は北面の武士として白河上皇につかえ、僧兵の強訴を防ぎ、九州の賊を討つなど軍功があり、父忠盛は鳥羽法皇につかえ、瀬戸内・九州に跋扈していた海賊討伐に功があった。清盛は実父は白河上皇との説もあるが、保元・平治の乱で力を伸ばし、ついには従一位太政大臣の地位にまで登り、その一門には公卿（3位以上の貴族）16人、殿上人（5位以上の貴族）30人、知行国は日本全土の半分に近い30国あまり、荘園は500ヵ所に及んだといわれている。また清盛は娘徳子を高倉天皇の女御とし、その皇子は治承4年（1180年）に即位して、第81代安徳天皇となった。

この頃清盛と法王および家衆との関係は次第に悪化、同年5月には平家に対する最初の武力による反抗運動がおきた。源頼政・以仁王との宇治挙兵である。清盛は突如安徳天皇を奉じて福原に移った。福原とは今の神戸で平氏の別荘があったところである。旧勢力を断って新しい政治をしようという狙いだった

ろうが、土地が狭少で造営が思うにまかせぬうえ、京都にいる公家や僧侶寺社の反発をうけて、その年のうちに再び京都にひきかえした。なおこの福原の舎殿は平家が都落ちをして西に走る際火をかけて焼払ってしまった。

このように平氏は武家として出発しながら、無限に貴族化することでその勢力を伸ばしていった。しかしその事は逆に武家としては弱体化することで、やがて源頼朝を棟梁とする武家勢力におされて亡んでいった。これら各時代の都の位置を図示すると第2図のようになる。

第2図



## 7. 鎌倉・京都・京都室町時代

武家政権でありながら、そのまま旧政権の所在地である京都に腰をすえ、無限にそれに近づくことで結局は去勢されて亡んでいった平家の姿をまのあたりに見た源頼朝は、自分の開いた幕府を都から遠く離れた鎌倉の地においた。ここは関東武士発祥の地にあり、旧勢力に毒される恐れのもっと少ない土地であった。

鎌倉は海にひらかれた港湾都市でもあり、ここから奥州や北九州、さらに中国まで船で往来することが出来た。そのうえ背後は東・北・西の三方を丘陵で囲まれており、それをこえて中に入り込む道は尾根を切り開いた“切通し”を通らねばならぬよう設計されていた。“切通し”は鎌倉七口といって、西から極楽寺坂、大仏坂、化粧坂、亀谷坂、巨福呂坂、朝比奈坂、名越坂の七つあり、それらをつなぐ尾根は、人工的に切り落した崖となっていて、その内部は一個の巨大な城塞となっていた。この中幕府の政庁と町屋があったのだが、政庁は海岸から奥まった谷戸に設けられ、町屋は海に近い比較的広い地域につくられていた。人口を測る史料は皆無に近いが、建長4年(1252年)に幕府が行った民家の酒壺の調査から、約1万戸くらいの戸数があったろうとの推定がある。この時代の一戸の推定人口を示す数字もないが、江戸時代の平均一戸約5人より多いとすると、5~10万の人口はあったろうと考えられる。ともあれ前代の平安京・平城京にくらべると著しく狭い市域になるので、かなりの過密都市であったろうことは疑いない。

ここで御成敗式目(貞永式目)が制定され、律令による政治とは異った武家の政治が行われた。未曾有の困難といわれた元寇は幸に切りぬけることができた。その恩賞をめぐって武将たちの不満をまねき、元弘3年

(1333年)新田義貞軍に攻められ、執権高時以下自殺して鎌倉政権は亡んだ。

北条氏滅亡後政権の主導権をめぐる争いがおき、一時新田義貞と組んだ後醍醐天皇が政権を握ったかにみえたが(建武中興)、やがて足利尊氏におされ南北朝分裂ののち、実権は尊氏の手握られた。延元元年(1336年)尊氏は京都に幕府を開き、建武式目を定め、同3年北朝から征夷大将軍に任ぜられた。これから15代将軍足利義昭が織田信長のために京都から追放された天正15年(1573年)までの約240年を室町時代と呼ぶ。室町時代、または室町幕府という呼び名は、3代将軍足利義満が、その邸宅を京都北小路、室町に営んだことから出た言葉である。

武家による政権の所在地が、鎌倉から京都に移ったわけで、武家政権の遷都であるが、では何故北条氏から足利氏に政権が移った場合、その政庁の所在地を鎌倉から京都へと大きく移動させたのであろうか。その答は簡単に将軍家北条氏は亡びたとはいえ、関東にはまだ北条氏の勢力が強く残っており、足利氏による新しい政治のためには、それからのフリー・ハンドを得るためには遠く離れ、天皇の居所であり、また日本の最大の(手)工業都市であった京都が適正だったからである。

## 8. 安土・桃山・江戸時代

守護地頭といった武家領主と寺社公家ら荘園領主たちの連合政権といった性格をもった室町政権は、その出発点から安定性に欠けていたが、応仁元年(1467年)将軍家の相続争いに、将軍家を支える有力守護大名家の相続争いもからんで、二派に分れた将軍家にこれも二派に分れた守護大名たちが加わって争いを始めた。東軍は細川勝元を中心に24ヶ国16万、西軍は山名持豊を中心に20ヶ国9万の軍兵が京都を舞台に果てしない争いをつづけた。これを応仁の乱と呼んで約100年も続くが、

この間に京都の町は戦火に焼かれてしまい、将軍家の勢力は地におち、またそれを支えていた大名達も戦に疲れはてていった。このようにこれまで日本を支配し続けていた上層社会の力は衰え、守護代以下の在地勢力が段々と力を伸ばし、お互いに相手を征服してより強大になるための武闘をくりかえすようになる。これが下剋上の時代と呼ばれる戦国時代である。淘汰・統合は段々と進み16世紀半ばころには、伊達・上杉・後北条・武田・今川・織田・毛利・長宗我部・大友・島津といった人達が一頭地を抜く有様になっていたが、そのなかでも織田信長が頭角をあらわしてきた。彼は天正4年(1576年)近江の安土に、それまでにみられない巨大な近世城下町をつくった(近世城下町はこの2年前に、羽柴秀吉が近江の長浜につくったのが最初だといわれている)。近世城下町とは、それまでの中世城郭とちがって、要害を主とした山城ではなく、領国の中央、政治経済の中心地に設けられ、天守をいただく城郭部分と、その周囲をとりまく町屋部分とが一体の存在で、大量輸送を考えて舟運のきく水につけているのが一般であり、長浜も安土も琵琶湖につけてつくられていた。

織田信長が安土を選んだ理由は、この土地は東と西をつなぐ交通の要衝であるのみならず、日本海側と京都をつなぐ物資輸送路である琵琶湖水上輸送路もおさえる位置にあったからである(当時までは日本海側の物資は若狭湾に面した敦賀か小浜で陸上げされ、陸路で琵琶湖まで運ばれ、湖を舟で都へと運ばれていた。西廻りの航路が開発され、大阪の地位が上るのは江戸時代に入った1650年ころである)。

安土はこのように当時としては他に比類のない交通の要衝であるうえ、京都の旧勢力からは離れ、しかも旧勢力を監視するには好個の位置を占めていた。これが信長が天下統一の拠点として安土をえらんだ理由である。



しかし信長の時代は長く続かず、それに替った豊臣秀吉（大阪・桃山を本拠とする）の時代も短くて、世は徳川氏の江戸時代に移っていった。

徳川家康が江戸に入ったのは天正18年（1590年）8月1日のことである。小田原に拠る後北条氏を討つため、秀吉に従って小田原に来ている時、従来の領地（三河・遠江・信濃・甲斐・伊豆）に代って、関東を与えられたからである。この時これら5ヶ国を失うぐらいなら、いっその際秀吉に反して兵を挙げようと騒ぎたてる家臣たちのなか、家康は一人満足げに笑っていた、という話がある。もちろん眞偽は正しようもないが、遠謀の人家康は、はるかに後の政権構想をえがいていたのだと解されている。

彼が江戸に入ったとき、もちろん太田道灌の遺構なるものが残っていて、本丸・二丸・三丸なるものがあつたが、石垣はなく土をかきあげた土手があり、海岸に出入りするところに数ヶ所木戸があり、城内の建物も葦ぶきの古屋で、玄関には階としては舟板が三枚ならべられている程度、しかも城下には茅葺きの家が100件ほどあつた程度のものであつた。これに大改修を加えて天下の城下町、將軍の御膝元として体裁をととのえるのは、慶長8年（1603年）からはじまる江戸市街地の建設と、同9年からはじまる江戸城の大改築である。これらは、“天下普請”といつて、ほとんど全国の大名家たちを動員して行われ、寛永10年（1633年）ころ、ほぼ予定の仕事が終つた。しかし翌11年の“諸大名妻子在府制”，翌12年の“参勤交替制”実施により江戸は大膨張をはじめ、再開発計画にとりかかつた矢先、明暦3年（1657年）の江戸大火（名暦大火）で、江戸城天守閣以下ほとんどの市城が焼失してしまつた。その後若干の計画のもとに再建にとりかかるが計画を上回る大発展をとげ、幕府はじまって約100年経過した元禄時代には、人口100万といわれる世

界有数の巨大都市になつた。

このように関東の江戸を政権の本拠とした徳川家康と、その前の実権者豊臣秀吉とでは政権構想が大きくちがつていた。豊臣秀吉については、尾張中村の小百姓の出でなくて、さる皇族の御落胤であるという、貴種落胤伝説があるが、これは彼自身が流したものだといわれている。これで判るように彼は天下を握ると、天正13年（1585年）関白となり姓を藤原と改め、翌14年には律令官制では最高位の太政大臣となり、豊臣という姓を朝廷から賜り、同16年には京都に聚落第をつくつて後陽成天皇の行幸をおおぐなど、彼は新しく生まれた社会の新しい支配者でありながら、わが国古来の伝統的権威である皇室に、限りなく近づくことで自己の権力を権威づけるという手法をとっている。

これに対し秀吉のあとをうけた徳川家康はかなり趣を異にしている。彼は慶長8年（1603年）征夷大將軍に任命されたことを政権掌握の抛り処として、江戸に幕府を開くが、彼はあくまで武家の棟梁として政権を握るといふ、鎌倉政権、室町政権の伝統に乗ろうとしている。

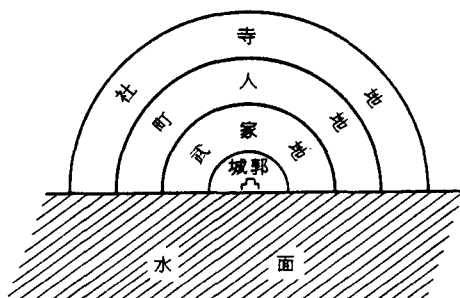
家康は三河国松平郷を本拠とする在地小領主の出であるが、天下を取ると自己の家柄を権威づけるために、上州世良田郷に住む足利氏の支流の親氏が、某年某日落飾して諸国流浪の旅に出、松平郷で入婿したのが徳川氏の祖先であるという話を組みあげている。これも一種の貴種流離譚であるが、貴種はあくまで室町將軍家をつくつた足利氏であつて、秀吉のように皇室ではない。したがつて皇室の下にあつて自分を無限にそれに近づけようとした秀吉と、皇室をあくまで自己の政権の下に置いて（たとえば「禁中並武家諸法度」）、これをコントロールしようとする家康の政治姿勢に違いがでてくるのである。それは自己の政権政庁を天皇の居所としての京都そのものではないが、それに出来るだけ近い桃山・

大阪に置いた秀吉と、大きく切り離された江戸におくという政都のえらびかたの違いにも現われてくるのである。

それ以前の日本が、上から下へと組みたてた社会とすれば、江戸時代からは下から上へと組みあげた社会である。江戸時代は300諸侯というが、実際には約270ほどの諸侯（大名）があり、その上に幕府が乗るという組みたてになっていた。したがって江戸時代に“国”というのは、今日の日本ではなくて約270ほどの藩のことであった。その藩は徳川幕府に一定の制約をうけていたが、経済的には自立した存在で、その藩独自の財政と税制をもっており、したがって独自の経済政策を持っていた。そのような藩の政庁（都）が城下町と呼ばれる存在であった。徳川氏といえどもその中の一つの藩で、約700万石という他に抜きん出た領地を持っているほか、幕府という藩連合体を統・コントロールをする役目をもつ存在であった。したがって江戸は大名としての徳川氏と日本全体の統率者としての両機能を兼ねた城下町であった。

城下町は一定のルールでつくられた人工的都市であった。それを図示すると第3図のようになる。まず城下町は海・河川・運河・湖などの違いはあるが、水についているのが原則であった。これは領内人口の約一割を集めた巨大消費都市の消費物資と、領内の物産を

第3図 城下町の仕組み図



移出し、また移入するための運輸の便を考えたことであった。つぎに城下町の中心には城郭部分があり、領主の居所・政庁および、場合によっては藩の最上級家臣の居所もここにあった。つぎは武家地で、ここに家臣団がほぼ階層別、職種別に居住していた。その外側は川や溝・堀などで区切られている事が多いが、領内から集められた商職人が集住していた。江戸時代では“兵農分離”ということがよく云われるが、農商の分離も同時に行われ、兵と商（工を含む）が農から分離して城下町に住むのが一般であった。またこの町地（町人地ともいう）には他領から入り、他領に抜ける“天下の公道”が通っているのが一般であった。町地の外は寺社地で、ここは城下町防衛も考慮した配慮で、一朝事ある時はここが城下町防衛の外郭障地となる筈であったが、江戸時代は平和が続いたので、現実には市民のレクリエーションの場としての役割をした。

## 9. 江戸から東京へ

慶応3年（1867年）末から明治元年（1868年）の前半は日本史でももっともあわただしい時であった。慶応3年10月24日には15代将軍徳川慶喜が将軍職の辞任を申し出、12月9日には朝廷王政復古の宣言をだす。翌明治元年1月3～4日にはそれを不服とする在京幕府軍との間に鳥羽・伏見の戦いがあり、いわゆる戊辰戦争がおこる。6日慶喜は軍艦で大阪を出航江戸に向い、朝廷側は7日すかさず慶喜追討令をだし、2月9日には有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任命している。いよいよ東征軍の出発、西郷、勝の会見による江戸開城等、一連の事件へと連ってゆくのだが、大久保利通によって大阪遷都論が提起されるのは、このような匆忙の間であった。事のおこりはつぎのようである。

明治元年1月17日総裁有栖川宮熾仁親王か

ら、今後どのようにしたらよいだろうと諮問をうけた大久保利通は、一大英断をもって幕府親征の軍をおこすとともに、天皇は大阪に巡幸してそこに行在所を設けると良いでしょうと答えた。これを契機に利通は大阪遷都論を固めようと参与の広沢眞臣と後藤象二郎に相談をしたところ賛意を得たので、岩倉具視を説得、そのそえ書を得て1月23日遷都に関する建議書を提出した。これが大久保の「大阪遷都の建白書」といわれるものである。それによると維新の大業を成就し、その実績をあげるには遷都が第一であり、遷都の地は大阪が最適である。というのは大阪の地は海に面して外国との交際にも、また富国強兵のために商工業をおこし、陸海軍を養うにも適しているというのである。

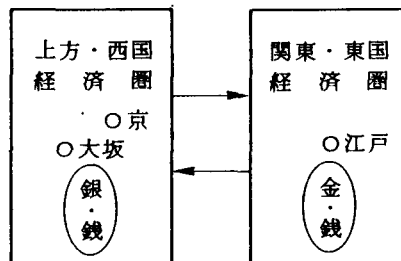
この大阪遷都案は昨秋大久保利通が木戸孝允を山口に尋ね、ひそかに王政復古の大計をはかったとき、できたことであるが、一度大阪遷都案が朝議にのぼると、賛否両論議論沸騰して容易に結着が付きそうになかった。反対論の中心はもちろん、約1000年も京都を根拠地としてきた公家たちで、「この計画は薩長の陰謀であって、その私権を拡張するためのものだ」と猛反対をした。そしてその中心人物が前内大臣久我建通・議定中山忠能であった。

このようにして議論が定まらないうちに閏4月になって徳川將軍家に一度没収していた領地を与えようという話が出てくると、福井の松平慶永は江戸の地を徳川家に賜うよう運動を始めた。これをみた大久保利通と木戸孝允は先の大坂遷都論を撤回、京都を首都、大阪を西京、江戸を東京とし、天皇は便宜これらの首都を巡幸すればよい、という新しい案を提案した。これにたいし江藤新平と大木喬任の佐賀藩出身者は、東国地方の民心を得るためには、速に天皇が江戸に幸してこれを東京とし、京都を西京としてこの間に鉄道を敷設して両者を結ぶのが最良という案を提出

した。これについても賛否両論があり公家たちは強硬な反対論、また山口藩士たちの中にも反対を唱えるものもあったが、結局木戸孝允、広沢眞臣を説いて遷都に同意させ、木戸が岩倉具視と密議して同12日天皇から木戸に江戸行幸の内意を伝えることで、江戸を明治政権の首都にすることが決まった。

ところでこの時、首都を大阪とするか江戸とするかでその後の日本の発展に決定的な差があったはずである。まず第一には江藤新平と大木喬任の主張するように、江戸を首都にせず大阪を首都にしておれば、東国の人心が新政府から離反していた可能性は高かったろう。また経済的にも日本は東西に分離していた恐れがある。というのは江戸時代の日本は第4図のように金を主要通貨とする関東・東国経済圏と、銀を主要通貨とする畿内・西国経済圏とがあった。

第4図 江戸時代の経済構造図



これを金経済圏に足場をおく徳川氏が力で銀経済圏をおさえこみ、統合していたというのが江戸時代の基本構図であった。幕末政争はこのような情況のなか、銀を主要通貨とする畿内・西国経済圏が、皇室をいだけて離反反撃したのだと経済史的には説明できる。

とすると新しい政権の首都をどちらにおくかで、以降の日本歴史の展開は決定的に違ったはずである。もし万一大久保利通の最初の建白書の通り、明治政権の首都を大阪にしていたら、あのような中央集権の統一国家は簡単には生まれなかったはずである。首都の選択は重要である。